

成果報告書

研究成果発表のための国際学会参加

環境情報学部3年 石崎佳織

1. 概要

2010年9月28日～10月2日にアメリカジョージア州アトランタで開催された Grace Hopper Celebration of Women in Computing 2010 へ研究成果発表のため参加した。

2. 目的

現在コンピュータ科学の分野に従事している女性の割合は世界的に少なく、特に日本ではおよそ12%である。また、上昇率も年0.3%に留まり女性研究者がマイノリティの立場でなくなるにはほど遠いと言える。私自身も女性研究者の卵として問題意識を抱えていた。そこで、女性コンピュータ研究者のための学会 Grace Hopper Celebration of Women in Computing 2010 (以下GHC) の存在を知り、各国の女性研究者との意見の交換や自身の研究発表のために参加することにした。

3. 参加学会について

“Women in Computing”と学会名に入る本学会は、女性研究者のための学会として Anita Borg Institute for Women and Technology が主催している。2010年で10回目の開催となったGHCは、28カ国2000人以上の参加のうち女性は95%以上を占めた。他のコンピュータ科学系の学会とはほぼ正反対の男女比である。また、学部生・院生・博士などの違いの他、研究分野やバックグラウンドも様々であるためセッション講演は複数の部屋で並列的に行われ自分の興味のあるものや立場にあったものを選び参加する形式になっている。

4. 成果・感想

ここでは参加したセッション講演やイベントと成果・感想について述べていく。

【Barbie has a Pink Laptop: Redefining How the World Views a Computer Scientist】

「私たちはコンピュータ科学の分野で活動している。でも何がコンピュータ科学の定義なのか共通認識がとれていない。Computer Scientistって何なのか改めて考えて定義してみよう。」ということテーマにしたセッション。3～4人に別れてディスカッションを行う形式である。私が参加したグループはフランス・アメリカ・インドの子から成るグループ。話し合う中で、「Computer Scientist = オタク！（に見られる）」の方式はどこの国でも共通認識として存在していることが分かった。もう少し女らしく見られるにはどうすればいいか、などの討論を行った。

【What is Research?】

学部生向けのセッション講演で、これから研究をしていく上で何を目標にしていけばいいかなどについてのお話。日本では「お金のため=悪いこと、不純」のイメージがなんとなくあるが、積極的に「お金をもらうことは生きること、そこに標準を合わせつつ自分のやりたいことを進める必要がある」と言われ納得し、自分の将来に対する見方が変わった。

【ポスターセッション】

約200名がポスター発表者として参加し、私も **From Steam Technology to Quantum Computation via LEGOs** というタイトルで研究発表を行った。英語発表は初めての経験だったが、伝える気持ち+ボディランゲージが大事なことと認識した。2時間半ほどで20人以上への説明を行った。



(左から発表したポスター、メインセレモニーの様子、協賛企業のパネル)

【全体を通して】

女性研究者はこんなに力強いのか、と衝撃を受ける毎日だった。オープニングセレモニーが一番広い部屋で行われていて、数千人ほどの女性が集まっている中、Anita Borg Instituteの会長さんが"Are you a woman in computing?!"と聞くと会場中から"Yeahhhh!!"と大声があがる。その誇りと自信をもった声が非常に印象に残っている。そして自分もその中の一人であることをとても嬉しく思った。

謝辞：本研究は2010年度慶應義塾大学湘南藤沢会シンポジウム・研究ネットワークミーティング基金による支援により実施された